これぞ老舗 ～やまがたに息づく 356

富士奴（ふじやっこ）［河北］

安眠の寝具、こだわり提供

客に合う枕 調整何度も

店内のベッドに寝てもらって枕の調整を行う社長の鈴木基由さん（右）。富士奴は客の安眠にこだわる　＝河北町谷地

河北町谷地で寝具販売店を営む富士奴は進取の気風を持ち、利用者の安眠にこだわり信頼されてきた。社長の鈴木基由さん（66）は寝具に携わり4代目となる。初代に当たる松治（1881～1923年）と息子の啓治郎（1900～65年）が1919（大正8）年、現店舗の場所で営んでいた精米や種ごうし作りのなりわいに、製綿を加えたことが始まりとなった。

当時の布団は家々の女性が自ら作るのが一般的で、綿屋は綿を打って納めていた。松治親子は布団作りもしたが、他と同様に製綿が中心。その中でも、地域でいち早く電気を引きモーターを使っていたため、これを活用し良質の綿を作ったという。数年後に松治が東京出張中に急死する事態となったが、啓治郎は電気に明るく、突然の独り立ちにもうまく対応したらしい。

■「谷地奴」から

現社名の富士奴は啓治郎の時代、綿製品に付ける名前として戦後から使い始めた。富士山の「富士」にしようとしたが既に他業者が使っており、祭りで勇壮な姿を見せる「谷地奴」から取った「奴」を加えた。地域の誇りを名に冠することに、地元への思いと製品に対することへのこだわりの強さがうかがえる。

高度経済成長期を迎え、3代目で基由さんの父・啓一郎さん（1925～97年）は現店舗の場所に寝具専門店を開いた。61（昭和36）年のことで「西村山では初の寝具店だったと聞いている」と基由さん。店名も「富士奴」とした。当時はシーツがまだ珍しく、初売りで値引きするちらしを配ると、大勢が開店を待って並んだ光景を基由さんは覚えているという。

4年後の65（昭和40）年には人通りが多かった近くの谷地中央通りに新店舗を構えた。その後に谷地中央通りは拡幅され、富士奴の店も大きくなった。当時の結婚では、嫁く側が自分たち夫婦と来客用で4組以上の布団を用意し、夫の家に持って行った。啓一郎さんは品質にこだわり職人が腕によりをかけて綿と布団を作った。団塊世代の結婚時期にもなり布団製造は増え、多い年は千枚に達したという。通りにはアーケードが設置され、書店、飲食店、洋品店、酒屋などが並んだ。通りに行けば何でもそろった。

そんな中、求められる寝具は変化していく。昭和50年代は次第に安価な品が人気となり、布団は化学繊維を入れた製品が広がっていく。60年代になると健康志向が高まり、暖く熱れない羽毛や羊毛を入れた高価な布団が増加。綿布団は徐々に減ったが、富士奴は客のためにどう役立つかを考え対応していった。

東京と京都で布団作りと営業を学び、76（昭和51）年に家業に入った基由さんは85（同60）年、社長に就任。その後、他に先駆け枕選びに着目。「一人一人に合った枕を選べる店にしたい」と89年、店に三十数種類の枕をそろえ、来店客が使い心地を確かめられるよう体験用のベッドを置いた。96年には現在地に移転。大手寝具メーカーがオーダーメード枕製造を始めると、2002年に取り入れた。

■根強いファン

現店名は「すいみんハウスふじやっこ」。基由さんは「脳から体全体に広がる神経は頭蓋を通る。枕は首を優しく支えるものでなければならない」。土台はやや堅め、首に接する部分は柔らかい枕が良いと説く。同時に寝返りをしやすいように敷き寝具選びが大切といい、枕との組み合わせが肝要だ。

現在は店に四つの体験用ベッドを置き、来客が敷き寝具の寝心地を確かめながら枕作りができる。基由さんは妻の静子さん（62）と共に客の要望に丁寧に応え、内部の素材や高さを調整する。基由さんは「枕の調整は1回だけでは終わらない。2、3回と来てもらうことで、その人に合う枕になる」と話す。

インターネットを通した買い物が一般的になり、寝具も自宅のパソコン画面を通して購入できる現代。富士奴は顧客一人一人に寄り添い、理想の寝心地を一緒に求める姿勢を崩さない。客は河北町内にとどまらず東根市や村山市、山形市からも訪れるという。綿布団も、根強いファンのため基由さんが作り続けている。

「眠りは一日を元気に生活するために大切。良い眠りを作るのが寝具の役割」と語る基由さん。静子さんも「良い眠りを寝具とアドバイスを通じて提供したい」と話す。人生100年時代と言われるようになり、健康で長生きするには眠りの質がより重要になる。「先祖ら愚直に仕事をし、商人というより職人気質だった。私も眠りを通してお客さまの役に立ちたい」。今後も手間を惜しまずに安眠を届ける決意だ。（黒田昌太）

人生100年時代「一日を元気に過ごすため」

富士奴の現店舗「すいみんハウスふじやっこ」

一人一人に合った枕にするため、素材や高さを変えられる

1965（昭和40）年に谷地中央通りに開いた富士奴の店舗。通りには多くの人通りがあった

・創業からの歴史

- ■1919（大正8）年　鈴木松治と、息子で2代目の啓治郎が製綿を始める
- ■戦後　綿製品に「富士奴」の名前を使い始める
- ■1961（昭和36）年　現在地に寝具専門店「富士奴」を開店。法人組織にする
- ■1965（昭和40）年　谷地中央通りに店舗を移転
- ■1985（昭和60）年　4代目基由さんが社長に就任
- ■1989年　枕の重要性に着目し、店内で約30種類から選べるようにする
- ■1996年　現在地に店を移す。その後に店名を「すいみんハウスふじやっこ」に変更